

# 「こおりやまの米」通信

平成25年7月16日



郡山市

イメージキャラクター

「かくとくん」

編集：郡山市

JA 郡山市 (TEL. 921-0724)

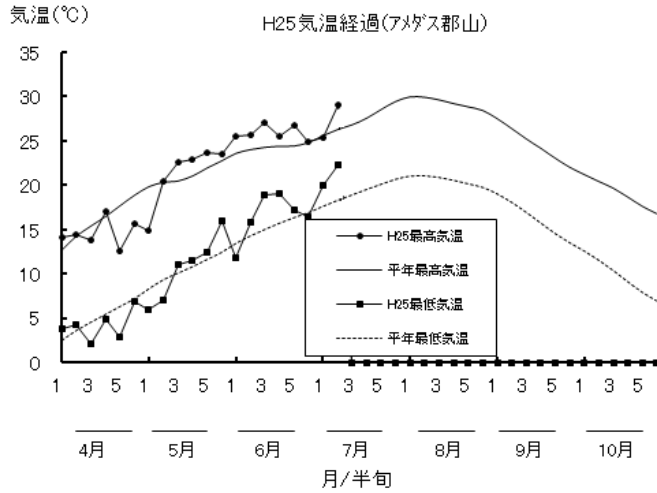
NOSAI 郡山田村 (TEL. 933-3307)

県中農林事務所農業振興普及部 (TEL. 935-1310)

発行：郡山市農作物生産対策協議会 (郡山市営農推進課 TEL. 924-3761)

## Vol.7 ~穂肥の量と時期~ 次号は9月上旬(刈取適期)

\*最新号はJA各支店窓口にそなえてあります\*



7月16日 生育調査結果

品種 (調査地点)	年次	草丈 (cm)	茎数(本)		葉令
			株あたり	mあたり	
コシヒカリ (三穂田)	本年	75.2	29.8	468	10.5
	平年比(%)*差	108	106	87	0.4
コシヒカリ (田村)	本年	77.5	26.7	550	10.7
	平年比(%)*差	108	100	104	0.2
ひとめぼれ (安積)	本年	70.4	36.3	545	10.2
	平年比(%)*差	113	122	118	0.2
天のつぶ (喜久田)	本年	66.9	19.6	319	10.0
	前年比(%)*差	110	65	57	0.6
あきたこまち (湖南)	本年	62.1	23.3	451	8.8
	平年比(%)*差	103	104	103	0.4

### 1 生育概況

7月2半旬までの気温は平年に比べ高めとなり、日照時間は多く、降水量は少なくなりました。

7月16日の生育調査の結果では、草丈はやや長く、茎数はほ場によりばらつきが大きい状況です。葉色は平年並からやや淡くなっています。幼穂の状況から、平坦部のひとめぼれは8月3日、コシヒカリは8月9日、高冷地のあきたこまちは8月5日、まいひめは7月31日に出穂すると見込まれます。

### 2 天気予報

<東北地方 1か月予報> (平成25年7月12日 仙台管区气象台 発表)

期間の前半は、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、天気は数日の周期で変わる見込みです。向こう1か月の平均気温は、高い確率50%です。降水量は、平年並または多い確率ともに40%です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに40%です。気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

### 3 作業のめやす

(管内主要品種の予想値です。ほ場ごとに生育を確認し作業日程を決めてください!)



(参考) 水管理期間中の水田水温と水田地温

### 4 水管理

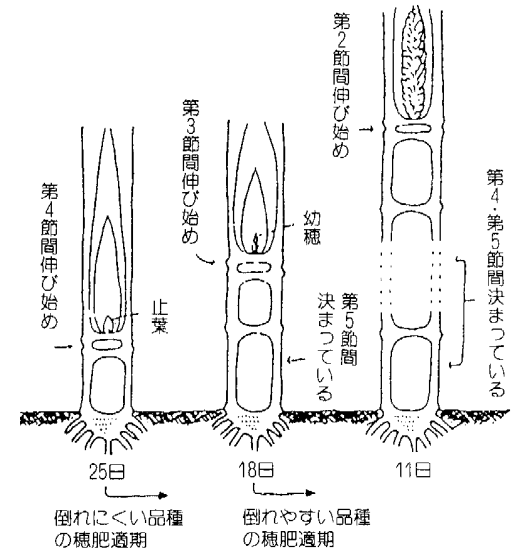
- (1) 中干し後は、間断かん水により根を健全に保ちましょう。  
(低温の恐れがある場合は深水にしましょう)
- (2) 出穂期以降に高温が続く場合は、できるだけ掛け流しをして水田の水温・地温を下げて、根の活力を維持しましょう。

区名	最高(°C)		最低(°C)		平均(°C)	
	水温	地温	水温	地温	水温	地温
掛け流し区	25.4	24.9	21.4	21.6	23.1	23.1
常時湛水区	28.4	26.2	23.4	24.1	25.4	25.1
間断かん水区	30.4	29.0	22.3	23.3	25.5	25.8

(2000年 福島農試)

## 5 穂肥 ～適正な穂肥で倒伏を防ぎましょう！～

- (1) 現時点での出穂は、平年より「3日程度早い」予想ですが、今後の天候により変化しますので、幼穂長等を確認し、適期に追肥しましょう。
- (2) コシヒカリは、出穂15日前にチッソ成分2kg/10aの施用を基本とします。草丈が長く葉色の濃いほ場は穂肥の量を減らすか、施用時期を少し遅らせましょう。有機質入り肥料を使用する場合は、ゆっくり効くので、5日程度早く施用しましょう。
- (3) 出穂5日前以降の実肥は、玄米のタンパク質が高まり、食味が低下するので行わないでください。



\* 基肥一発の場合は、原則として穂肥は行いません \*

追肥の量と施用時期のめやす (コシヒカリ、10aあたり)

肥料銘柄	N-P-K	効き方	施用量
NKC6号	17-0-17	早い	12kg
IB4号	15-4-15	ややゆっくり	13kg
こおりやま2号 (有機入り)	10-2-10	ゆっくり (5日早く施用)	20kg

幼穂長による出穂前日数の判定

幼穂長	出穂前日数	備考
1.0mm	25日	幼穂形成始期
2.0mm	20日	
20.0mm	15日	
80.0mm	12日	減数分裂期

<参考：倒伏懸念がある場合の穂肥対応>

品種名	倒伏の懸念がある場合		福島県施肥基準	
	穂肥時期の目安	穂肥量の目安	標準的穂肥適期	穂肥量 (窒素成分)
コシヒカリ	7日前	1kg/10a	15日前	2kg/10a
ひとめぼれ	15～10日前	1.5kg/10a	25日前	

## 6 病虫害防除 ～いもち病に気をつけよう！～

### (1) いもち病防除

① 田植え時に長期持続型殺虫殺菌剤を箱施用した場合でも、いもち病への効果は徐々に落ちてきます。  
穂いもちについては改めて薬剤等で防除を行ってください。

② コラトップ粒剤5 (出穂30～5日前) などの薬剤で予防する場合は、今すぐに散布しましょう。

(2) 稲こうじ病は、病原菌の菌核が大きくて重くあまり移動しないため、毎年同じ田で発生する傾向があります。  
モンガリット粒剤(出穂21～14日前)やZボルドー粉剤DL(出穂10日前まで)等で防除しましょう。

### (3) 斑点米カメムシ類 ～斑点米カメムシ類多発注意報が発令されています！～

畦畔の草刈りは、出穂14日前までに行いましょう。薬剤で防除する場合は、下記薬剤等を散布しましょう。

水面施用剤による防除：穂揃期から乳熟期に湛水状態で散布し、7日間以上止水する。

防除薬剤：スタークル粒剤 (3kg/10a) など

散布剤による防除：乳熟期 (出穂7～10日後) の薬剤散布が基本。

その後発生が予想される場合は7日おきに追加防除。

防除薬剤：MR. ジョーカー粉剤DL (3～4kg/10a)、スミバツサ粉剤20DL (3～4kg/10a) など

※殺虫剤はミツバチなどの有用昆虫に対し長期間影響を与える場合があるため、養蜂業者との連絡 (所有者不明の場合は県中家畜保健衛生所 TEL923-1661) を密にし、事故のないようにしましょう。

この資料は、平成25年7月10日現在の農薬登録情報に基づいて作成しています。

平成25年度福島県農薬危害防止運動展開中 (6/10～9/10)